

## 「浮世絵の素顔に迫る」～知られざる浮世絵の世界～第三弾

2019年9月13日（金）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

9月13日（金）9:30～11:45 に表参道の東京ウイメンズプラザに於いて、JGA 主催による第一支部「浮世絵」研修が実施されました。日本女子大学名誉教授、国際浮世絵学会常任理事としてご活躍されている及川茂先生を講師にお迎えし、総勢39名（JGA 正会員29名、非会員8名、運営委員2名）が参加し、遠くは大阪府からもご参加頂きました。

講義では、浮世絵の基本的な知識はもとより、絵画に対する西洋人と日本人の視点の違いと海外から見た浮世絵に対する評価が日本人の想像以上に高いこと、又、それに至る歴史背景、特に今回は1858年の日英修好通商条約締結から1867年のパリ万博までの期間に浮世絵が欧米文化に及ぼした多大な影響にスポットを当てて、「ジャポニズムー北斎を中心にー」をテーマにお話がありました。通常ジャポニズムと言えば、ゴッホ、ゴーギャン、マネー等、パリ万博後の影響について説明されることが多く、今回は聞く機会も少ないパリ万博以前に関する大変貴重な内容でした。



浮世絵は当時、1枚が十六文（現在の500円程度）で売られており、障子が破れた時に補修用に貼られるのに使われることもあり、当時の絵画と言えば狩野派や琳派と言った高価でとても庶民の手に届くものではなかったものに対し、浮世絵は庶民が楽しむものとして人気を博しました。世界の時代背景としては、平民が自らの手で市民権を勝ち取った1789年のフランス革命、1760年代からのイギリスの産業革命、1776年のアメリカ独立や中国の清の乾隆帝の時代で、日本では田沼意次が失脚し、松平定信が老中首座として寛政の改革を始めたばかりで、儉約を強いられた時でした。又、フランス革命後のヨーロッパ絵画では伝統的な宗教画から独自の作品を生み出そうとするドラクロワに代表される20世紀初頭まで続くロマン主義が台頭しました。



日本は1853年のペリー来航後、1858年にはジェームズ・ブレース（エルギン卿）の立あいのもと日英修好通商条約を締結し、その時の秘書であったローレンス・オリファントが1860年に「エルギン卿中国・日本紀行記録」をロンドンとニューヨークで発行し、その中で浮世絵を写し取り、日本人の生活を紹介して人気を博しました。また、フランス陶器（セルヴィス・ルソー）の図案家ブラックモンは北斎漫画に描かれた花や昆虫をモチーフにプレート等を作成し、1867年のパリ万博に出品し大変な人気でした。江戸幕府も大量の浮世絵を出品し、芸者、富士山同様日本のシンボルとなりました。それまでの西洋絵画は宗教画中心で二等辺三角形の構図を基調とした絵画が多く、それに対し一般庶民の生活があらゆる構図で描かれた浮世絵に衝撃を受けたことでしょう。今回は、浮世絵に関するパリ博以前のお話が聞け、今後のガイディングに生かそうという意見が多く聞かれました。

（第一支部運営委員）